

アートを楽しむワークショップ体験ミュージアム

実施者：山原すすむ（グローバル&イノベーションコンサルタント）

北桂樹（現代アーティスト）

柴前田勝太郎（株式会社ゆめみ）

日 時：2020 年 9 月 5 日（土）10:00～12:30

会 場：オンライン開催（ZOOM）

1. イントロダクション

■本日のメニュー ～ふたつのワークショップ紹介

酒井：本日、司会を務めさせていただく酒井です。今日はアートを楽しむ体験ミュージアムということで、ふたつのアートのワークショップのどちらかを選んで参加していただきます。美術館という設定ですので、ワークショップ・キュレーターと呼びますが、これからワークショップをされるお二方をご紹介します。

ワークショップ A は、「対話型鑑賞ワークショップ～現代アートの視点の飛躍を知る～」です。実施していただくのは、グローバル&イノベーションコンサルタントの山原すすむさん。今日は現代アーティストの北さんと一緒にワークショップをしていただきます。山原さん、簡単にワークショップの宣伝をお願いします。

山原：おはようございます。ご紹介いただきました山原と申します。日頃は企業のグローバル展開、イノベーション創出のお手伝いや、大学でのリーダーシップ開発、コーチングの授業などもさせていただいています。最近では、アート思考の広まりをととても感じていて、アーティストの北桂樹さんと一緒にビジネスパーソン向けのアートワークショップなども実施しています。今日も北さんと一緒に、現代アートの視点を体感しながら対話をするような、そんなワークショップをしていきます。ご興味を持たれた方は、ぜひのちほどお会いしましょう。

酒井：ありがとうございます。ワークショップ B は「ブラインドスケッチワークショップ」です。デザインストラテジスト、ワークショップデザイナー、スクラムマスター、2030SDGs 認定ファシリテーターなど非常に多岐にわたって活躍されていらっしゃいます柴前田さん、よろしくお願いいたします。

柴前田：おはようございます。普段はゆめみという企業で、新規事業開発や組織開発、ブランディングなどを主に手がけています。私自身はアートというより、組織内におけるコミュニケーション、対話の場づくりというところに主にコミットしてまして、そういった文脈のなかでアート作品を媒介に用いています。今回は対話型鑑賞の中のひとつの手法である「ブラインドスケッチ」をみなさんと体験してみたいと思っています。

ブラインドスケッチを簡単に説明すると、まず2人組になって、片方の方にだけアート作品を観ていただきます。観ていない相手の方にどんなアート作品であるかを説明していただいて、観ていない方は対話の中からその作品をイメージしていくというようなものになります。どうぞよろしくお願いいたします。

酒井：ありがとうございます。ではみなさん、どちらのワークショップに参加されるか考えていただきたいと思います。決まりましたでしょうか。それでは、それぞれのワークショップへいってらっしゃい。

2-1.ワークショップ A「対話型鑑賞ワークショップ～現代アートの視点の飛躍を知る～」

山原：ご参加ありがとうございます。僕たちのワークショップでは、現代アートの視点みたいなことを、現代アーティストの北さんと一緒に体感しながら対話をするワークショップをしていきたいと思います。さっそくですが北さん、まず自己紹介をお願いします。北さんの作品もご紹介いただきますので、ぜひみなさんにはチャットに感じたことを書いていただければと思います。

■現代アーティスト・北桂樹の「Máni」

北：北桂樹と言います。今は、少し前まで京都造形芸術大学という名前だった京都芸術大学大学院の芸術専攻の博士課程に在籍していて、「Art Thinking & Innovation」をテーマに、コンテンポラリーアートと現代写真の価値生成という研究をしています。

これは学部にあったときの「Máni」という作品です。

<http://keijukita.com/cn2/mani.html>

2011年に入学した京都造形芸術大学ではまず、「芸術とはなにか」というところから考えはじめました。その答えをくれたひとりが、パウル・クレイというスイスの画家。彼は「目に見えないものを目に見えるようにすることこそが芸術だ」と言っています。僕もまた、僕の興味があるゼロを目に見えるようにしていこうと思うようになりました。

同じく2011年に起きたのが、東日本大震災です。震災直後、僕が住む相模原は計画停電があり、水や空気と同じようにあたりまえにあった電気が無くなるという経験をしました。つまり、無くなるものとして電気は存在するという事に気付いたんです。真っ暗になった街に立つ街灯が抜け殻、電気のデスマスクのように見えてきて、街中に散らばる街灯をポートレートという形で作品にしていきました。この作品ではおそらく、ものの見方ということに対して、あるひとつの提示ができたのかなと思っています。おかげさまで評価をいただき、世界中で展示していただくといったことが続いた、すごくありがたい作品です。

山原：北さんの思いからつくられた作品ですが、みなさんにもチャットに感じたことを書いていただきました。

北：アートというのはアーティストの思いは当然あるんですけども、受け手に届いてからが完成だと思っています。アーティストの考えも解釈のひとつでしかないというのが、僕の中でのアートに対する考え方ですね。

山原：みなさんがチャットに書いてくれたように、みなさんなりの感覚で受け止めて、そこでその人なりのアートが完成するということですね。私なりの解釈をさせていただくと、問いを自分なりに立てていくのがアートだと。まさにデザインとアートの違いだと思うんですけども、発注元などから何らかのテーマを与えられるのがデザイン、アートはテーマそのものを自身で立てていく。今よく言われるアート思考みたいなものを学ぶのにも、この北さんの作品はいいリファレンスになるのかなと思います。北さん、チャットに質問をいただいているのですが、「お客さんにこれは街灯ですって説明はしないですか？」

北：展覧会ではしないです。これが何かということを書いてしまった時点で、意味が固定されちゃうので。そこ

が多分、カメラマンかアーティストかの違いかなと思います。

山原：アーティストとして内発的動機から表現して、受け手に委ねていくと。しかも日本だけでなく、世界中でフィルム何百本と撮っていらして、まさにパッションですね。このアーティストならではの情熱にも、いろんな形で学ぶところがあるのかなと思いますね。

■アートをみて手紙を書く

山原：いよいよワークショップの方に入っていきたいと思います。まずは「アートをみて手紙を書く」というワークです。北さんではなく、別のアーティストの作品をみていただき、この作品も作者のことも知らない相手に、この作品についてわかるように手紙を書いてください。10 分間時間をとりますので、作品を鑑賞しながら感じながら、200 文字ぐらいの手紙にしていいただき、チャットに投稿していただければと思います。

(ワーク：アートをみて手紙を書く ※中略)

山原：はい、ありがとうございます。みなさんも読んでいただくとわかると思いますが、感じ方、捉え方、伝え方は人それぞれですね。トーンが違ったり、手紙の相手を感じとれたり、絵をトリガーにしていろいろな感情が湧きたっていることが感じられます。内なる感情、個人的な感覚を言語化するというワークをしていただきました。では、ここから対話型鑑賞に入っていきたいと思います。北さん、対話型鑑賞の説明からお願いします。

北：はい。僕の対話型鑑賞は世間のものほどカチカチはしていません。よく言われるお作法や How to にはあまり意味がないと思っているからですが、最低限のところだけを。対話型鑑賞は「みる」「考える」「話す」「聴く」という 4 つからなります。直感力を大切にしながら作品をみて、そこで自分が持った感情を“なぜそう思うのか”と問いただし、他の人に共有するために言語化し、相手の話を聴く。今回はオンラインで 40 名弱の方が参加をするというところで、この「みる」「考える」「話す」というステップを、手紙のワークでやっていただいた形になります。

■他者の言葉を「聴く」

山原：では、ここから他の鑑賞者の言葉に耳を傾けていきましょう。どのように感じられたのか、自由にお話いただけますか。

(対話：全体でアートを観ながらの対話 ※中略)

北：非常に面白いですね。いろんな言葉が出てきたんですけども、ものの見方には、FACT(客観的事実)と TRUTH(主観的解釈)のふたつがあります。FACT は何かって言うと、誰が見ても変わらないひとつの事実。縦長の絵画であるとか、赤、青と黄色と、白と黒の線によって構成されているとか、真ん中に人物が描かれているみたいなものが客観的事実です。一方で、鑑賞者の数だけあるのが、TRUTH(主観的解釈)です。寂しそうに見える、勢いよく描かれている、暖かい色合い、描かれているのは人のようだ、みたいなことが主観的解釈になります。

このふたつを、整理しながら行ったり来たりすることが大切です。例えば、縦長の絵という事実から何を思うか。逆に寂しそうに見えると思った場合には、どの部分からその思いが出てきたのか。FACT と TRUTH を行ったり来たりしながら、自分の新しい解釈を見出していくのが、現代アートの対話型鑑賞の醍醐味かなと思っています。

ちなみにこれは、ジュリアン・オピーという、イギリスのポップアートのアーティストの作品でした。僕なりの解釈もありますが、それもあくまでひとつの解釈にすぎません。

(北さんによる作品解釈 ※中略)

■グループで対話をしながら作品を観よう

山原：全体でジュリアン・オピーの作品をみてきましたが、ここからはもう少し小さいグループで、別の作品の対話型鑑賞をしていきましょう。

ZOOM のブレイクアウトルームにわかれて、3 名もしくは 4 名のグループで対話をしてみてください。Google スライド上に作品を掲載しています。静止画と、あと今回は立体物になるので動画も用意しています。じっくり鑑賞しながら、さきほどの FACT、TRUTH なんかも意識しながら対話をしてみてくださいだと思います。

(ワーク：グループで対話 ※中略)

北：活発な対話がありましたね。この作品は、アートバーゼル香港 2019 で展示されていたワリード・ベシュティ (Walead Beshty) の FedEx 作品でした。アメリカ在住の現代アーティストですが、世間の評価としては写真家、彫刻家などと言われている人が作った作品です。

(北さんによる作品解釈 ※中略)

■アートによって、新しい情報をつくりだしていく重要性

北：いろいろな見方がありましたけれど、みなさん、これがアートなのかっていうところから考えさせられたと思うんです。アート作品というのは結局答えが出ないっていうことが、あるひとつの重要なポイントなんですね。

マルセル・デュシャンが 1917 年にトイレをひっくり返した作品『泉』をつくって、これはアートなのかという議論が起きたところから、コンテンポラリーアートが始まったと言われているんですけども、100 年経った今でも議論は続いているんですね。世界には 70 億人も人間がいるのに、100 年経っても誰も説明ができない。コミュニケーションによって、新たな情報を生み出し続けています。対話型鑑賞やアート鑑賞することで新しい情報を増やし続けることができるということが、アートの重要な点なのかなと思います。

ジェームズ・ラブロックという「ガイア理論」で知られる思想家の『ノヴァセン：〈超知能〉が地球を更新する』(NHK 出版) という本を最近読んだのですが、非常に特徴的だなと思われることが書いてありました。人間だけがあらゆる情報をビットに変え、それを集めて進化を後押しする能力を持ち、進化してきたと。自然進化じゃなくて、新しい情報を集めて、その情報の中から選択して進化できるんだっていうことですよね。

今は、検索で何でも“答えらしきもの”が知れちゃう時代で、自分たちで新しい情報を作ることからどんどん離れていってしまっているんですね。そういう意味においても、対話型鑑賞やアート鑑賞で、どんどん新しい情報をつくっていくことが重要なのではないかと思います。

山原：最後に北さんにまとめてもらいましたが、いかがでしたでしょうか。現代アートの視点の飛躍みたいところを、対話型鑑賞としてご体験いただきました。ありがとうございました。

2-2.ワークショップ B「ブラインドスケッチワークショップ」

柴前田：今日は3回ほどブレイクアウトルームで2人組にわかれていただいて、アート作品を観ながら、話したり聞いたり書くということをしてしたいと思います。アートに正解があるわけでもないの、ただ一緒に楽しむことができるればいいかなと考えています。よろしくお願いします。

■チェックイン ～身の回りにあるもので気に入っているもの

柴前田：ではまず、ブラインドスケッチの練習も兼ねて、自己紹介と「身の回りにある気に入っているもの」を伝えるワークをしていただきたいと思います。10分間、ブレイクアウトルームでペアになったみなさんに時間をお渡しします。気に入っているものを探してきて、相手に説明してあげてください。伝え方はお任せします。丸っこいとか柔らかいとか、色とかいろんな言い方があると思うんですけど、具体的な名前を言わないで、それを相手に説明していただきたいんですね。それを Google スライドの方に書き出していただければと思います。気に入っているものをみせずに、言葉で伝えることが、ブラインドスケッチの練習になります。では、どうぞ。

(ワーク：ペアで自己紹介・身の回りにある気に入っているもの紹介 ※中略)

■ブラインドスケッチ ～ターン1

柴前田：では、ブラインドスケッチに入っていきます。今回はオンラインなので、Google Arts&Culture という Web サイトに収蔵されている絵画作品を観ていただこうと思っています。進め方としては、2人組の片方の方に Google Arts&Culture の URL をお伝えしますので、どのような絵かを相手に伝えてください。もちろん、作品名、作者名は伝えないように。さきほどと同様に絵そのものではなくて、どうやったら相手に伝わるかというところを考えながら、話をしてもらえればと思います。相手の方は話を聞いて、質問しながら、スケッチしてみてください。絵ではなくて言葉でもいいです。書くのは手元のメモ用紙でもいいし、Google スライドでもどちらでも大丈夫です。

ワークのポイントとしては、「人のものの見え方・捉え方を知る」ということと、「伝える力・聞く力のトレーニング」になります。どんなに見たまま聞いたままを伝えようとしても、どうしても伝言ゲームのようになるんですね。かならずそこには人の解釈が入ります。その人なりのものの捉え方というところですね。ワークを通じて、人によって伝え方や捉え方が違うことや、どのような情報があれば自分はイメージできるのかということを知っていただきたいなと思っています。

あとは何よりも「絵画作品を楽しむ」ことを大切に。絵画作品の捉え方とか楽しみ方はそれぞれだと思うので、人の捉え方も含めて、楽しんでいただけたらと思います。では、ブレイクアウトルームへいってらっしゃい。

(ワーク：ペアでブラインドスケッチ ※中略)

柴前田：はい、おかえりなさい。みなさん活発に話していってらっしゃいましたが、ペアごとに違いがありましたね。頑張って説明をしている方もいれば、どういったことを伝えれば伝わるのかを確かめながら話をしているペアもありました。まだ、片方の方はまだ絵をみていない状態だと思うんですが、今のお題の絵はこちらでした。



(Two People: The Lonely Ones エドヴァルド・ムンク 1899)

いかがでしたか。どれぐらいギャップがありましたか。絵をみる瞬間が、「ああ！」ってなるところだと思うんですけど。これはムンクの『Two People: The Lonely Ones』という絵です。版画になりますが、そのタッチだったり、どういうシーンなのかだったりを説明された方も結構いらっしゃったんじゃないかなと思います。

美術館で絵を観るときは、作者名や作品にまつわるストーリー的なものも同時に受け取ると思うんですけど、ブラインドスケッチではそういった情報がすべて除外されて、観た方の解釈が入った伝わり方になってきます。聞き手の方は、相手の解釈が入っていることを前提にするか、相手の解釈含めて全部受け止めるのかっていうところで、聞き方にも結構な違いが生まれるのかなと思っています。

■ブラインドスケッチ ～ターン2

柴前田：今度は聞き手と話し手を交代して、ブラインドスケッチをしてみたいと思います。さきほどの聞き手の方に違う絵の URL を送りますので、同じように進めていただければと思います。URL を受け取った方は、絵を観て、どう伝えようかっていうのをちょっと考えてみてください。

プレゼンテーションにもいえることですが、相手に何か伝えようかというときには、伝えるものをまず観察、理解して、自分の中に落とし込むことが大事ですね。それがないと相手に伝えることが難しいと思うので、まずはじっくりと観る、観察するっていうことを大事にしていいただければと思います。では、行ってらっしゃい。

(ワーク：ペアでブラインドスケッチ ※中略)

柴前田：ブレイクアウトルームを回って思ったのですが、みなさん初対面ですね。すごい仲良しかって感じがするぐらい話が盛り上がってましたが、気のせいでしょうか。1 回目と全然違うタイプの絵だったと思うので、うまく伝えられるかなと思ったんですけど、手元を見た限り、みなさん結構伝わっていたなあと思います。そうでもないですか (笑)。ということで、今回の絵はこちらです。



(Composition ワシリー・カンディンスキー 1944)

どうでしょうか。先ほどのムンクとギャップをつけるために、あえて抽象画を選択してみました。カンディンスキーの抽象画です。カンディンスキーはロシアの画家で、議論はありますが、抽象画の祖ともいわれています。これは『コンポジション』シリーズといわれるもので、カンディンスキーの代表的な連作のひとつなんですけれども、なかでも結構わかりやすい方の抽象画ではあります。

ただムンクの絵と違って抽象画であるがために、観ていない人にどうやって伝えるのかっていうところは結構悩まれたんじゃないかなと思います。ムンクの方は、男と女が暗い海にいますといった情景を描いたものだったので、そこまでギャップはなかったかもしれませんが、抽象画はやはりむずかしいところがあったかと思います。

■組織内コミュニケーション活性化の文脈で、ブラインドスケッチを

柴前田：元々、このワークを私が社内でやってるときにはブラインドトークとして、絵を描かずに話すだけにしていたんですね。というのも、私が所属している組織って7割ぐらいがエンジニアで、絵を描くっていうところにハードルを感じる方が多かったの。今回は、いろんな方がいらっしゃるだろうなと思いつつ、スケッチという形でやらせてもらいました。

会社組織内のコミュニケーションを考えたとき、ミーティングに限らず、どんな場であっても他者に正しく内容が伝わるのかということは非常に大事ですね。そうしたときに、このブラインドスケッチ、ブラインドトークは、とても有効なコミュニケーションの練習になります。アート作品であったり、動画とか映画であったりでもいいんですが、見たものをどう相手に伝えるのかを考え、実際伝えてみて、さらに相手はどう受け取ったのかを確認することができるから。表現の仕方だとか、伝達の仕方っていうところですね、何をどうすれば伝わるのかっていうことを確かめることができるんですね。

もしよろしければ、みなさんも所属している組織やコミュニティといったところで試してみてくださいると面白いのではないかなと思います。今回使った Google Arts&Culture もありますし、このコロナ禍で多くの美術館がオンライン鑑賞できるようになっているので、これを機に使ってみるのもいいんじゃないのかなと。絵を選ぶ時には、今回の絵くらいの要素ものをおすすめします。セザンヌとかはなかなか伝えづらいんですね。言葉で説明しやすいかどうか、絵を選択するポイントになってくるかなとは思っています。

あともうひとつ、ペアワークということも今回の大きなポイントでした。ペアワークって結構強力だなと思っていて、ある意味、話さざるを得ないみたいな状況になりますから。対話を重ねていけば重ねていくほど、やっぱり関係性が密になってきて、どんどん話しやすくなってくる、伝えやすくなってくるっていうところがあると思います。ですから、何かしらの場を設計する方がいらっしゃったら、ペアワークをうまく取り入れると、コミュニケーションがとりやすくなってくるというのはあるんじゃないかなと思っています。

では最後に。チェックアウトというところで、Google スライドに付箋的なものを用意したので、もしよろしければ、書き込んでいただければと思います。今日参加してみてどうだったかといった、自分自身の振り返り的な感じであったり、もしくは私に対してのフィードバックであったりを書き込んでいただければと。書くことでみなさんの振り返りと共に、チェックアウトにもなるかなと思いますので、よろしければお願いいたします。ありがとうございました。

3.トークセッション・Q&A

酒井：では、最後のセッションに入りたいと思います。山原さん、北さん、柴前田さん、ありがとうございました。それぞれのワークショップがどのようなものだったのかを共有いただきつつ、最後の質疑応答に移りたいと思います。

(トークセッション：ふたつのワークショップの内容共有 ※中略)

■質疑応答 ～チャットを活用して

酒井：では、チャットに書き込んでいただいた質問に、お答えいただきたいと思います。まず、北さんへ。「観察し、考え、解釈し、新しい情報が生成する場をつくることがアートの目的でしょうか。もしそうならば、北さん自身が何枚も何枚も写真を撮って、選んで選んでというつくり込みをするのはなぜでしょうか」。

北：そうですね。答えが出ないままに、新しい情報が生み出されて、再解釈され続けるのが良いアート作品だという前提があって。そういう余白の多い作品をどうやってつくるのかっていうことを考えてるからこそ、何枚も何枚も撮っています。たくさんの中から適切なものをどうやって選ぶか、見せたもの以上の何かを生み出すにはどうしたらいいかと常に考えているので。アート作品としてすごく戦略的にたくさん撮って、選ぶってような行為がそこにあるのかなと。もちろん、選ばないという方法でつくるってこともあり得ると思います。

酒井：ありがとうございます。同じく北さんで、「対話型鑑賞ワークショップで鑑賞する作品はどのようなものを選んでいきますか」。

北：僕なりの対話型鑑賞ではというところにはなってしまうのですが……。ぱっと見てわからないからと扉を閉めてしまいがちなアートに対して、他者の見方がキーになって入り込めて、そこから新しい情報をつくり出せるってところを僕は目的としています。なので、世間の対話型鑑賞とちょっと狙いが違うというところはあるんですが、僕の場合は、僕がちゃんと説明できる作品を使うようにしています。自分の目で観てきた現代アートで、自分なりに何かしらの琴線に触れた体験を繋げられるようにという視点を持って選ぶようにしています。

酒井：ありがとうございます。今もちょっと触れていただいたんですけども、「対話に向いてる作品、向いてない作品のポイントはどこにありますか」。

北：山原さんと何回も一緒にやらせてもらった経験上でいうと、ひとつは見た目でわかりやすいかどうか。アートとしてわかりやすいというのではなく、情報が取りやすい、FACT が取りやすいっていうことが、ひとつ重要なかなと思っています。自由にアートを観てもらったときに、実は FACT を取り出すのは結構難しいんです。どうしてもわかりにくい現代アート作品を題材にするので、TRUTH ばかりになる。でも、TRUTH だけでは全然だめです。インターネットが発達しすぎて、どんなものでも答えらしきものが検索できちゃう時代だからこそ、ものごととちゃんと向き合うことが大切だと思うんですね。そういう意味で、FACT も TRUTH もちゃんと出せるような作品を選ぶことが重要なかなと、これまでやってきた経験のなかで思うようになってます。

酒井：「対話型鑑賞が小学校教育に導入される可能性はあると思いますか」。いかがでしょうか。

北さん：可能性は全然あると思います。実は僕、中学の美術の成績が1だったんです。自分の作品をつくるだけじゃなくて、人の作品をどう観るかっていうことを学ぶようになってから、作品もよくなりました。対話型鑑賞によって作品の解釈もできるようになると、多分、世の中に対してのものの見方そのものが変わると思うので、そういう意味でも非常にいい教育になるんじゃないかなと思います。

山原：私もそう思います。私が大学で実施するときは、正解・不正解じゃなくて、みなさんの感じ方が大切だということを強調しています。視点の広がりとか、それぞれの感じ方が大切だというメッセージは、小さいころからの教育にはすごくいいんじゃないかと思いますね。柴前田さんのコミュニケーション起点でのアートワークショップは、学校のコミュニケーション教育にもすごく向いているのではないのでしょうか。柴前田さん、どうでしょう。

柴前田：はい。私も今日やらせていただいたものとはちょっと型は違いますが、大学生向けに行うケースはあります。小中学校の授業としても、対話型鑑賞、あと哲学対話なんかも取り入れていきたいという気持ちはありますね。身内話で恐縮なんですけど、娘が去年まで小学生だったんですけど、地元の小学校では対話型鑑賞をやっていましたので、これから増えていくんじゃないのかなとは思っています。

酒井：ありがとうございました。お時間となりましたので、このあたりで終了としたいと思います。みなさま、本日はご参加ありがとうございました。